

## ◆年頭挨拶◆

診療局長  
種村 匡弘

(兼) 外科統括部長・消化器外科部長・  
がん治療センター長・  
医療安全管理室長・  
臨床研修センター副センター長



新年あけましておめでとございます。

ご承知のように、昨年、令和2年の初めから新型コロナウイルスの流行が発生し、われわれが経験したことのない人類を脅かすパンデミックへと広がってしまいました。当院は特定感染症指定病院という社会的役割を果たすべく多くのコロナ感染症患者さんの治療に対応してまいりました。それに伴い診療局、看護局、事務局の方々は、通常の診療業務に加え、コロナ感染症患者さんの診療をお願いすることとなり大変なご苦労、ご負担をおかけしました。また地域医療の先生方には、救急患者受け入れを一時制限するなどご不便をおかけしました。皆さんの多大なる協力を得ることができ、何とか無事に新しい年を迎える事が出来ました。

まだ完全なるコロナウイルス感染症の終息が見えない中、これまで当たり前に行っていた多くの事が禁止・自粛を余儀なくされてしまいました。これは医療環境だけでなく、世界を取り巻く経済・社会環境にも大きな打撃は避けられず、更なる悪化の懸念から広い範囲で人類社会にマイナスの影響が及んでいます。一方で、感染予防ワクチンや治療法の開発が進むなど、わずかながら明るい兆しもあります。

2021年は丑年であります。丑は十二支

の2番目で、子年に蒔いた種が芽を出して成長する時期とされています。丑年には、先を急がず一歩一歩目前のことを着実に進めることが将来の成功につながっていくといわれています。本年はポストコロナ・ウイズコロナ時代の医療を再構築していくスタートの年であり、オンライン診療のニーズの高まりなど診療体制のイノベーションを進めると同時に、医師の働き方改革を含めた病院経営見直しを早急に行い、医療と社会の変容にマッチした「勝ち抜ける病院」を形成していく必要があると考えております。

当院はがん診療、救急医療を含めた高度専門医療を中心に、来院された方々の利便性、快適性をより考えた医療センターになりたいと考えています。患者さんが安心して質の高い医療を享受できるように、診療、看護、医療事務を含めた総合的マネジメントで医療の質を担保することを継続してまいります。『診療局長として、牛歩ではありますが、地に足をつけたゆまゆま進み続ける病院づくり』を一丸となって進めてまいります。

この新しい年が、より佳い年になるよう心より祈念致します。新年のご挨拶とさせていただきます。

今年もどうぞよろしくお祈りします。

## ◆年頭挨拶◆

大阪府泉州救命救急  
センター所長  
中尾 彰太

(兼) Acute care surgeonセンター長・  
重症外傷センター長



### 「新型コロナウイルス感染症と救命救急」

謹んで新春のお慶びを申し上げます。今年もよろしくお祈りいたします。

昨年を振り返りますと、何と言いましても、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の蔓延という、国難とも言える大変な事態を経験しました。

COVID-19の患者さんは、一定の割合で肺炎の臨床所見が認められ、報道等を通じて広く周知されてきたのはご存知の通りです。このため、特に医療に従事されておられない一般の方々の多くは、COVID-19が呼吸器内科や感染症内科などの「内科」の病気であると認識しておられるかもしれませぬ。しかしこの病気は、ひとたび重症化すると、全身の主要臓器が障害され、あらゆる集中治療が必要となる状況に追い込まれます。さらに、患者さんの状態はしばしば急激に悪化し、その際には迅速かつ適切に必要な処置をおこなうことが要求されます。このような場合、もはや内科医としての専門性だけで対応するのは困難となり、危機的状況に追い込まれた患者さんを安定化させるという、救命救急・集中治療医としての専門性が不可欠となります。

大阪府泉州救命救急センターでは、感染

症内科と連携し、重症化したCOVID-19の患者さんの診療に早期から対応してまいりました。われわれは、病気の種類を選ばず、命の危険があるあらゆる患者さんを救うという、救命救急・集中治療に従事する者としての気概をもち、全力で重症COVID-19の患者さんの診療にあたっております。

一方、救急医療はいわば「地場産業」であり、当センターには、地域内で日常的に発生するCOVID-19以外の救急医療提供のニーズを満たすことが当然求められます。しかしながら、第一波の対応においては、診療体制整備のために、日常的な救急診療を一時的に縮小せざるを得ない状態となり、近隣の医療機関の皆様にも多大なるご支援を賜りました。その後、院内診療体制の抜本的な改変、業務の再配分などの対応を経て、第二波以降の対応においては、引き続きご支援を頂きながらも、通常の救急医療体制を維持することが何とか可能となりつつあります。

今年、これまで構築してきた病院全体の救急医療体制を維持するのみならず、さらに臨機応変に機動的に対応できるように、科内の診療システムを発展させ、地域の皆様のあらゆる救急医療のニーズに応えるべく精励してまいります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお祈りいたします。